

---

# 俺と彼女の四重奏

高良あくあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女の四重奏

### 【Nコード】

N 6 1 3 7 Y

### 【作者名】

高良あくあ

### 【あらすじ】

明桜高校一年、月峰涼夜<sup>つきみね りょうや</sup>。天才的な記憶力を誇る彼は放課後、一人の女生徒とずっと一緒にいるらしい。え、それってもしかして…！？「別にそういう関係では無いのですよ」当然立ってしまつた噂を微笑んで否定する彼女は、大金持ちの家のお嬢様、高崎美<sup>たかさき</sup>絵<sup>みえ</sup>。けれど、彼女にはとある秘密があった。涼夜と二人きりになった瞬間、美絵はその態度を変える。そう、実は彼女、だつたのです！

タイトルは『四重奏』と書いて『カルテツト』と読みます。

## 第一話 色々と事情があるのです。

呆気無く失った夢は、俺の日常を大幅に変えてしまったただけであつて、それから何年経とうと世界は何事も無かつたかのように回つていた。当事者である俺もまた、空いてしまった穴から目を逸らすように、それまでの日々を繰り返そうとした。

けれど、どう足掻こうと戻らないものは戻らない。柱を失えば後は倒れるだけで、俺もまたゆっくりと、けれど確実に、壊れようとしていた。

そんな時に、俺は彼女に出会つたのだ。

いや 正しくは、『彼女たち』に。

\*\*\*

「いいか、理数科目というものがこの世に存在することがそもそも間違いなのだよ。分かるだろう？」

「いや、全然」

即答すると、彼女……文音あやねは呆れるように首を横に振った。

「分かつていないな、君は。理科も数学も、一体人生のどこで使うというのかね？ 君は買い物をするときにわざわざ因数分解をするのか？ 普通はしないだろう、個数を数えたいのなら小学校の加減乗除で十分事足りる。暗算が苦手なら電卓も携帯もある。私たち自身が機械になる必要はどこにもないだろう。それに君は、何かを見るたびにいちいちその原理を思い浮かべるのか？ 林檎が木から落ちた、それは地球には重力があるからだ。なるほど、それを説明するのは確かに大事なことだろう。だがそれは私たちが知るべきこと

なのかな？ 例えばその林檎が欲しかったのだとして、林檎を手に入れるために必要なのは『林檎が木から落ちた』という事実だろう。重力の存在など知らずとも人は生きていける、それは遙か昔に生きた人々が証明している。ならばそんな無駄なことを覚えずとも、私たちに他にはやるべきことがあるのではないか！」

「勉強することそのものが大事なんだ、とかよく言わないか？」

半眼で突っ込むと、彼女は鼻を鳴らす。

「役に立たないことを勉強することのどこが大事なかね」

「将来役に立つかもしれないだろ、思わぬところで」

「ふん、流石学年トップ様は余裕だな」

「何も捻くれなくても……」

嘆息すると、不機嫌そうだった文音はくすりと笑った。

「捻くれてなどいないさ、褒めているだけだ」

「その口調は絶対褒めてない」

「む……ばれたか」

真っ直ぐ伸びた黒髪はポニーテールで、制服はきっちり真面目に着こなして。無駄に男らしい口調で、しかしばつが悪そうに頬を赤らめる姿は、どこからどう見ても可愛らしい少女である。

……文音は、なあ。黙ってさえ、いればなあ。

「今、とてつも無く失礼なことを思わなかったか？ 涼夜<sup>りょうや</sup>」

「いや、別に？」

表情を変えずに肩を竦め、俺は話を元に戻す。

「でも文音だつて、別に成績悪いわけじゃないだろ？ 現国も古典も九十九点。英語は九十八点、倫理は九十七点。理系科目だつて、雪音に理系脳ゆきねを持って行かれたとはいえ平均は取れてるし……どこが不満なんだよ」

「強いて言うならば、全教科満点の君にそれを言われることが激しく不満だな。この化物め」

今度は向こうが半眼。……いや、うん。

「……事実だから何も言い返せないけどさ。でも、取れるものは取れるんだから仕方ないだろ」

「嫌味か貴様っ！」

「はいはい、突然キレない」

冷静そうに見えて、何気に三姉妹の中で一番短気なのが文音である。クラスこそ別だが、二か月も一緒に過ごしていると俺もすっかり慣れてしまつて、この程度のことでは動じない。

「顔に出ているぞ、涼夜。言っておくが君のその冷静さはいくらなんでも異常だ。それで、絶対記憶能力だったか？ 君が持っているのは」

「そんな大層なものじゃないけどな」

「む、そうなのか？」

首を傾げる文音に、苦笑を返す。俺の場合はちょっと人より記憶力が良いだけであつて、見ただけで完璧に暗記出来るレベルではない。……前に説明した気がするんだけどな。いや、あれは文音じゃなかったか？ 同じ顔だからややこしいよなあ。

「俺はそこまで凄くないよ。その証拠に、中学時代はせいぜい学年

で三番くらいだったし、百点も全部じゃなかったし」

「まずは基準がおかしいことに気づけ。だが、なら何故高校になって急にトップを死守するようになったのかね？ 記憶力が急に進化でもしたのか？」

「するか馬鹿。……色々あったんだよ、俺にも」

必死に打ち込んでいたものが突然消えて、俺に出来ることと言ったら勉強くらいになってしまったから。自分が存在する意味を見失いたくなくて、自分に期待する人にこれ以上失望されるのが怖くて、必死だったのだ。

そんな、言いようのない感情が顔に出てしまったのか……文音が気まずそうに俯く。

「……すまない」

「何で謝るんだよ」

対し、俺は苦笑。

「おかげでここに合格出来たし、悪いことばかりじゃないよ。だろ？」

「つまり、悪いこともあったのだろう」

「あー……………」

ますます俯く文音。俺もそれ以上言い訳は出来ず、目を逸らしかけ……彼女の瞳の端に、静かに留まり光る雫に気づいた。

「あーもう、何で文音が泣くんだ」

「な、泣いてなど……いない」

「ダウト。声震えてる」

突っ込むと、文音は諦めたのか、隠すのを止めて顔を上げる。

「だって……私は、知っていたのに」

「え？」

その言葉に、俺は目を見開いた。

「あれ？ 俺、文音に話したっけ」

「他の二人は恐らく知らないが、私には一度話してくれただろう。出会ってすぐの、君がやさぐれていた時期に」

「まだ俺がお前らの見分け方を知らなかった頃、か。……そっか。あれ、文音だったのか」

何とも言えない感情に襲われ、俺は目を閉じる。

ある意味、文音で良かったと言うべきだろうか。話をした相手がこいつの妹たち 雪音や琴音<sup>いづみお</sup>であつたとしたら、俺は恐らく余すところなく語らなければいけなかっただろう。傷口を押し広げて。それはそれで荒療治にもなったかもしれないが、それにしても荒すぎる。

その点、文音は優しい。彼女は何も訊かないでいてくれた。俺が感情のまま吐き出した言葉、それだけを真剣に聴いていてくれた。そのくせ何か他人の辛さ、他人の痛みだけは共有出来てしまって、そうして他人のために泣くのだ。見方によっては短所とも取れる、まったく損な性格である。

だが、それに助けられたのもまた、事実だったから。

何か言おう、と口を開く。けれど言葉が見つからず、閉じる。互いにそれを数回繰り返したせいで、嫌では無いが居心地の悪い、妙な沈黙が流れていた。

それを破ったのは、ぼつん、という水の音。

「あ……ほら、文音が泣くから雨降ってきた」

「それは私のせいなのかね、君っ」

僅かに赤くなった目で、文音は上目遣いに俺を睨む。

けれどその直後、彼女はまるで花が咲くように、嬉しそうに微笑んだのだった。



## 第一話 色々と事情があるのです。（後書き）

そこまでお久しぶり、でも無いでしょうか。初めましての方は初めまして。高良あくあです。

メイン連載である『幸福の在り処』の執筆もしなければいけないというのに、勢いで新作を始めてしまいました。

というわけで、『俺と彼女の四重奏』です。あらすじにもありませんが、『四重奏』と書いて『カルテット』と読めます。

この第一話は若干シリ阿斯寄りですが、説明回である二話・三話を乗り越えたら後はひたすらコメディ時々シリ阿斯でやっていこうと思います。楽しんで頂けたら幸いです。

## 第二話 彼女が一番厄介です。

「涼夜君、昨日文音のこと泣かせたでしょう？」

怒ったようにそう問いかけてきたのは、雪音だった。文音と全く同じ顔だが、浮かべる表情は文音の凜々しいものとは違い穏やかでおっとりしたもの。長い黒髪も、緩く三つ編みにしてあった。

「……ねえ、聴いてる？ 涼夜君」

「ああ、聴いてる。人って同じ顔してても髪型と表情だけでだいぶ変わるよな」

「聴いてないじゃない」

物凄く呆れた表情を向けられた。仕方がないので俺は会話に戻る。

「別に泣かせたわけじゃないんだけどな、向こうが勝手に泣いたというか……」

「あの文音が勝手に泣くわけないでしょ」

即答。ふむ、ここは流石妹と言うべきか。やっぱり何だかんだ言っても姉のことはよく分かっているんだな……などと思ったのも束の間。

「だってあの子、小さい頃にわたしがわざと……いえ、うつかりあの子の宝物壊しちゃっても泣くどころか逆ギレしたのよ？」

「それは俺も逆ギレする」

というか何してるんだ、こいつは。

「で、何があつたのー？」

「いや、だから別に何も……あ、そういえば雪音って理数得意だよな」

あまり触れてほしいことでは無かつたので、俺は強引に話を逸らす。まあ、そのうち雪音にも、そして琴音にも話すことにはなるだろうけど……それでも、自分から話すのはやっぱり嫌だったし。

雪音もそこまで本気で訊いているわけではなかつたのか、急な話題転換にあつさり乗ってくる。

「得意よー、大得意！ なあに、そんな話もしたのー？ 昨日。文音ってば気まずそうにしてて、全然教えてくれなくて」

「あーうん……どっちかというと、文音が一方的に語ってたかな。いかに理数が人生に不要か、熱く語ってた」

「あらあら」

眩しいほど完璧な笑顔を浮かべる雪音。……感じる寒気。まさに絶対零度、である。

「文音ってば、困ったわねー。どうしてくれようかしらー」

「……琴音ならともかく、雪音に文句を言う資格は無いと思うんだけど」

「やつぱり私物破壊かしらー。でもあの子綺麗好きだから、部屋をぐっちゃぐちゃに散らかしておくだけでも効果ありそうよねー？」

「いや、だから雪音だって文系科目は悲惨っていうか、平均に届いてすらいなというかそれどころか赤点ギリギリというか」

「何か言った？ 涼夜君」

「……何でも無いです」

笑顔で振り向かれると、まだ命が惜しい俺は否定するしかないわけ。……ごめん文音。でも妹の教育はしっかりしてくれ、頼むから。

「大体ねー、うちの学校のテストが難しすぎるのが悪いのよ？ わたしは悪くないの〜」

「そついうのを責任転嫁って言うと思うんだけど……仮にも県内有数の進学校ってことになってるんだから、当然と言えば当然じゃないか？」

「他人事みたいに言うのね〜？」

困ったように苦笑する雪音。……騙されるな、俺。腹黒なこいつのことだ、実は困ってなんかいないに決まっている。

確かに雪音の言う通り。ここ、私立明桜高校は、県内でも有数の学校である。国公立どころか海外の有名大学にも多数の合格者を出し、更に卒業生の半分はそのまま国内トップレベルである明桜大学に進学する。

そんな事情のせいか、授業も定期テストの内容もかなり高レベルであり、中学時代はトップだったのにここでは下から数えた方が早い、など日常茶飯事だった。他校で天才と呼ばれるレベルが、明桜では平均。その事実には衝撃を受けた生徒も多い。

……まあ、昨日の文音との会話からも分かるように、俺はそこまですぐにはいないわけだが。というか、全く困っていない。

「涼夜君。顔を見れば、何を考えているくらい分かるのよ〜？」  
「何だってー俺が今日の夕食のことを考えていると見抜くとはお主なかなかやるなー」

「棒読みは止めましょう？」

ジト目で俺を睨み、雪音は諦めたように嘆息する。

「まあ、涼夜君が凄いのは知っているし、涼夜君の頑張りの結果だから、怒りはしないけど……トップで合格した、っていう事実を妬むくらい、良いわよね？」

「雪音。怖いから」

目を逸らしつつ、学校繋がりでふと思い出す。

やたら頭が良いという事情から、『明桜高校卒業』や『明桜大学卒業』の肩書は金持ちの間では一種のステータスになっているらしい。もちろん金で入学出来るほど明桜は甘くは無いが、小さい頃から厳しく育てられている彼らにとっては問題ないことのように、どこのクラスも三分の一は金持ちだったりする。

そして、その中でも一番の財力と権力を持っているらしいのが、文音や雪音……そして琴音の家である、らしかった。俺はその辺りの事情には疎いから、よく知らないけど。

「……これが金持ち、ねえ」

思わず雪音を凝視すると、彼女は居心地悪そうに俺を睨む。

「ねえ、涼夜君。さつきから貴方、わたしに対して失礼すぎないかしらー」

「や、俺が失礼なのはお前ら全員に対してだよ。雪音だけじゃない」「自慢げに言うことじゃないわ」

可愛らしく頬を膨らませる雪音に、俺は苦笑。……そう、可愛いのだ。何でこいつらこんなに容姿だけは良いんだ。容姿だけは。

「そう言うセリフは、普段自分が俺に何をしているか考えてから言ってくれ」

「わたし、何かしたかしら？」

「ある意味お前が一番色々してるよ」

主に俺の時間を根こそぎ奪っていたり、ボケたり。

琴音もボケる上にトラブルメーカーだが、向こうは思いつきで動くため最終的に被害は小さい。ところが雪音はちゃっかり腹黒いため厄介なのだ。

ちなみに文音はというと、性格はどちらかというとツツコミであるはずなのにそもその考え方が捻くれているタイプ。よくもまあボケばかり集まったものである。やはり同じ環境で育つと似るのだろうか。

「だってわたしたち、そのためにここに集まっているんでしょー？  
涼夜君で……ああごめんなさい、涼夜君と遊ぶために」

「どっちも変わらないから、それ」

ジト目で睨むが、雪音はそんなこと意に介さず口に手を当てて笑う。

「だってツツコミって大体マゾでしょう？」

「違うから」

「えっ、違うのー！？」

はい、滅多にない雪音さんの叫び声入りましたー。

「何でそこまで驚くのが俺にはちよつと理解できない」

「だってどんなボケにも耐えられる強靱な精神力とそれを快感に変えられるマゾの気質が無いと出来ないじゃないー、ツツコミなんて！」

「全国のツツコミの皆さんに謝れ。……言っておくけど、俺は好き

でツッコミやってるわけじゃないから」

「ええ、知ってるわー」

にっこりと微笑む雪音に、俺は嘆息。やっぱり確信犯か、こいつ。

「大体、それならボケの奴らだってマゾだよ。ツッコまれると分か  
つていてボケるなんて俺には出来ないな」

「そんなこと言っちゃう時点で、涼夜君もボケの皆さんに謝るべき  
よー？ ……でも、そうよね。ツッコみ方によつては叩くし、もし  
かしたら『そういうプレイ』だって誤解しちゃう人もいるかも」  
「それはない」

「涼夜君が言っただんでしょ？」

「いや俺には雪音みたいにぶっ飛んだ思考なんてとてもとても」  
「酷いわ、涼夜君」

頬を膨らませる雪音。文音がやると頭がおかしいんじゃないかと  
心配に思ってしまうような行為だが、雪音がやると可愛らしく思え  
るから不思議だ。

「一体何が違うんだろうな、同じ顔なのに」

ポツリと呟くと、雪音は一瞬きよとした後、嬉しそうに微笑  
む。

「あらあら、涼夜君ったら頭が良いくせに知らないのね。違つとこ  
ろだらけじゃない、私たち」

「……悪い意味でね」

高校に入学してからのことを思い出しながら、俺は嘆息したのだ  
った。





## 第二話 彼女が一番厄介です。（後書き）

そんなわけで、説明回こと第二話です。第一話でも話に出てきた雪音ちゃんが出てきました。次女です。おっとり腹黒です。厄介。

ちなみにこのお話の舞台は基本的に放課後です。こいつら何で放課後にこんなどうでもいい話してるの？ と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、その辺りは本編で語ればいいな！ と思ってたり。基本ノリなのでどうなるか分からないけれども。

それではまた明日、第三話でお会いしましょう。……多分。だつてまだ書いてすらry

### 第三話　それが『三人』の秘密です。

放課後。帰りの挨拶も終え、今週は掃除も無いから帰るかと席を立つ。と、教室の入り口から聞き慣れた声がした。

「こんにちは。月峰君、いらっしやいますか？」

ただしその口調は、何度聞いても慣れない、優しげで穏やかなもの。教室の入り口に立つ『彼女』の問いに、応対していたクラスメイトは首肯しながら俺を見る。

「月峰ー、愛しの高崎さんたかさきが呼んでるぞ」

「愛しのって……別にそういう関係じゃないんだけどなあ」

嘆息しながら、俺はのんびりと歩み寄った。走り寄ることが出来ないのは『彼女』も分かっているため、急かしはしない。そして『彼女』の前に着くと、クラスメイトはにやりと笑う。

「照れるなって。今日もまた放課後一緒なんだろ？　爆発しろ」

「だから違っつて。じゃ、また明日ー」

教室内に声をかけると、残っている生徒からぱらぱらと声が返ってくる。その声を背に受けて廊下に出ながら、俺は『彼女』を見る。

「ツインテール……ってことは、琴音か」

「ご名答、です」

ぺろりと悪戯つぽく舌を出す彼女は、文音や雪音と全く同じ顔。それだけを聴けば、三つ子だと誰もが思うだろう。だが、違う。

「よく分かりましたねえ、月峰さん。『今日は』私だって」

「髪型で。……まあ、琴音は髪を見なくても分かるかな。『美絵』のとき、楽そうだから」

「あはは、まあ文音や雪音よりは楽ですねー。そこまで口調変わりませんからねー！」

心底楽しそうに笑う琴音。しかしそこで廊下の端から数人の生徒が現れ、琴音は一瞬表情を硬くする。しかしすぐにその表情は、さつきまで浮かべていた穏やかな笑顔に変わった。

「でさあー……あつ、みーちゃん！ 今帰り？」

そんな琴音の変化にも気付かず、歩いてきた女生徒たちの一人が琴音に声をかける。みーちゃん、と、彼女の本名に掠りもしない名を呼んで。

しかし琴音は気にした様子も無く、にっこりと。

「いいえ、月峰君にお勉強を教えてもらおうと思って。どこか空いている教室、ありませんか？」

「それだったら向こうの選択教室空いてたよー」

「ありがとうございます」

微笑む琴音に対し、女生徒は何か含みのある笑顔で首を振る。

「いいっていいって。それよりさ、みーちゃんもうまく考えるよねー」

「あ、それ私も思った！ 美絵<sup>みえ</sup>だって凄く頭良いくせにねー」

「……何のこと、ですか？」

笑顔のまま首を傾げる琴音に対し、彼女たちはなおも盛り上がる。

「放課後に勉強教えてもらうつて、凄くいい口実よねー！ 流石みーちゃんだわ」

「月峰君だって格好良いしモテるし、ほんとお似合いだねー！」

ここまで来て、ようやく俺は彼女たちの言っていることを理解する。

……こっちでも、か。

「何度も言ってるけど、俺たち別にそういう関係じゃ」

「月峰君も、照れない照れない。照れたら美絵に悪いでしょー！」

「いや、だから……」

嘆息する俺を見て、くすりと面白そうに、しかし優雅に笑う琴音。  
「残念ですが、本当に勉強を教えてもらっただけなのです。私がかなか理解しないから、毎日のように付き合っただけになってしまっただけ……月峰君の教え方が上手なので、つつい欲張ってしまっただけですよね」

困りました、と苦笑する琴音に対し、女生徒たちも頷く。

「分かる分かる、月峰君って教えるの上手そうだねー」

「良いなー美絵、あたしも教えてもらいたあーい」

「あんたは彼氏がないでしょー」

「うっさいなー月峰君の話してるの！ じゃ、二人とも頑張っただけー！」

嵐のように去っていく彼女たち。その姿が見えなくなるまで見送って、琴音は大きく息を吐いた。

「はー……疲れました」

「お疲れ、美絵」

「本気でやめてください月峰さん怒りますよー！」

きつ、と俺を睨む琴音に、俺は苦笑を返す。

「ごめんごめん。それにしても、お前らも大変だな。いつそ全部打ち明けちゃえば良いのに」

「……月峰さんみたいにふーんで済ませちゃう奇特な人、そうそういないですよー。普通は頭おかしいって思われるものです。三重人格なんて」

不意に、琴音の声が低くなった。俺はしまった、と僅かに後悔するが、その程度で引いていては俺たちの関係は 互いに爆弾を抱えていて、会話の中でうっかり触れてしまうような危うい関係は成り立たないから。

彼女……高崎美絵は、三重人格者である。彼女の中には常に、『長女』である文音、『次女』である雪音、そして『三女』である琴音の三人がいた。

周りに知られている、人当たりの良いお嬢様である『美絵』の人格は、彼女たちが意識して作り上げたもの。自分の家族、そして俺以外の前では、彼女は『美絵』として暮らしていた。

「俺は面白いと思うけどなあ」

「だからあー、そういう変人は珍しいんですってば！ ……っとと」

再び通りかかる生徒に、琴音は一瞬で『美絵』の表情を浮かべる。

「……とりあえず、空き教室に行こうか。早く勉強始めなきゃいけないし」

「そうですね、月峰君」

俺にとっては違和感バリバリの『美絵』を連れて空き教室に辿り着くと、琴音に戻った彼女は再び嘆息。

「だから、疲れるならやらなければいいのに」

「そういう問題じゃないんです……大体、『美絵』は十年以上やり続けていることですから、疲れたりしないんですよ！ 切り替えが疲れるんです！ まったく、本来なら月峰さんの前でも『美絵』でいるはずだったのに！」

「まあそれについては雪音と琴音が悪い」

初めて会ったときの『彼女』は、完璧に『美絵』だった。あれが三人の内誰だったのかは、今も知らない。クラスが違ったからもう会うことは無いだろうと、あったとしても廊下ですれ違う程度だろうと、気にも止めていなかった。

しばらくして再会したのは、『美絵』として振る舞う文音だった。一昨日の会話の通り、当時はまだやさぐれていた俺は文音に八つ当たりし、自分の身に起きた出来事を全て打ち明けてしまった。

その後、休日にも町の中で出会ったのが雪音だった。『美絵』ではない彼女は、迷ってしまったと苦笑しながら俺に道を訊ねてきた。学校とはまるで違う彼女に驚きながらも、俺は見えて見ぬふりをした。そして学校に行くと、そこには『美絵』の皮を被る雪音がいた。見ているうちに、俺はぼんやりと気付いてしまったのだ。

別人だ、と。俺が過去を話した彼女と、休日に出会った彼女と、

そして今見ている彼女は……完璧に別人であると。

それからは早かった。『美絵』を呼び出し、訊ねたのだ。責める気も、他の生徒に話す気も無かった。ただ、知りたくて。

俺の話を聴いた彼女は、『美絵』とは違う微笑みを浮かべて、ゆっくりと頷いたのだ。

『凄い観察力ねー、貴方。その通りよ』

そうして雪音は語った。自分たちは『高崎美絵』の身体に宿った、それぞれ別の人格であると。

彼女たちは眠るたびに入れ替わり、次に表に出る人格は目覚めるまで彼女たち自身にすら分からない。眠っている間だけ会話が出る彼女たちは、その間に『美絵』を作り上げたのだ。

「月峰さん？ 何をぼんやりしてるんですかー！」

そんな琴音の声で、俺は現実に戻された。

「いや、俺が何でここにいるのか回想を」

「そんなの良からさっさと教えてください！ 二次関数苦手なんです私」

「口実じゃなかったのか……大体、琴音は文理ともそこそこ出来るだろ」

そこそこ、どこるか全教科八十点台は取れているレベルである。テストの日は琴音が出ていると一番安全らしい。逆に一番危ないのは雪音が出た時で、その時は文系科目の点数が壊滅的になるためテスト前日は三人で恐怖しているらしい。アホだこいつら。

「ところで私思っんですけど、部室一つ奪いませんか？」

「そこ、日常会話の延長のように自然な口調で物騒なことを言わない。大体何部だよ」

「部活動まででつち上げる必要はありませんよ、各所を脅して部室だけ貰えれば。だって放課後の度に空き教室探すの面倒じゃないですかー」

「お前らが俺を拘束しなければ済む話なんだけどな」

「だって見張つてなきゃいけないじゃないですか！」

そう。雪音に全て聴いた翌日、俺の前に現れるなり問答無用で人のいない教室に拉致したのが、他でもない琴音である。

『秘密を知られたからには生かしてはおけません！　と言いたいところですけど、私は優しいので監視程度で許してあげます！　放課後の貴方に自由は無いと思ってください！』

そんなわけのわからない理由から、素に戻った三人と毎日駄弁る日々が始まったのだ。話を聴いた雪音は何故か琴音以上に乗り気。唯一の良心たる文音すら、反対はしなかった。

「別に見張らなくても、お前らのことは言わないって。言っても俺にメリット無いし」

「メリットがあつたら言っんですけど！」

「割と」

「やっぱり駄目です見張ります！　卒業まで見張ってやります！」

叫ぶ琴音を見ながら、俺は嘆息した。

文音も雪音も、琴音も嫌いではないけれど。

……それでも彼女と噂が立つことを好ましく思わない俺が、確か



にいるのを感じながら。

### 第三話 それが『三人』の秘密です。（後書き）

ここまで来てやっとプロローグが終わった感じでしょうか。  
というわけで、軽く人物の説明・解説などしておきましょう。

つきみね りょうや  
月峰涼夜

主人公。語り手。高校一年生。

天才的な頭脳を持つ、どこか冷めたところのある少年です。その洞察力や観察力から『美絵』の三姉妹に目をつけられてしまい、共に放課後を過ごす仲になります。

基本的に冷静であり叫ばない彼に、果たしてツツコミが務まるのでしょうか。

たかさき みえ  
高崎美絵

文音・雪音・琴音の三姉妹が他の生徒の前で出す、『表』の人格常に敬語で柔らかな笑顔を浮かべる、人当たりの良い『お嬢様』な性格。

あやね  
文音

『美絵』の長女。真面目だけど短気。文系。理数滅べ。

ゆきね  
雪音

『美絵』の次女。おっとり腹黒。理系。文系滅べ。

ことね  
琴音

『美絵』の三女。ハイテンション敬語。文理ともいける劣化版涼夜。

……説明が酷いですがまあそこは気にしない。

というわけで、ここからは涼夜と三人の内誰か一人がひたすら雑談を繰り広げるコメディ多めなお話となります。たまにシリアスもあるけれども！

次回もなるべく早くお届けできるよう頑張りますので、たのしみにしていただければ幸いです。

では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6137y/>

---

俺と彼女の四重奏

2011年11月20日16時42分発行